

新町・古町 町屋マークデザインワークショップ通信 vol. 5

第2回

新町・古町シンボルマークデザインワークショップ 2014年8月10日 於：PS オランジュリ

●各班による新町・古町マークのプレゼンテーション

●採用マークの選考

1 ついに町屋マークデザインワークショップも最終回を迎えました。今回はいよいよ、各チームがデザインした新町・古町マークが発表され、そこから審査によって実際に町のマークとして採用される案が決定されます。プレゼンテーション・審査は一般公開となっており、会場には新町・古町の住民の方々をはじめ、多くの人たちが見学に訪れていました。

コンペの審査員は、町屋研究会の他、新町・古町の地元関係者、熊本市役所、熊本市現代美術館などの各代表者が務めます。さらに今回は、特別審査員としてデザイナーの水戸岡鋭治さんもかけつけてくれました。

3 多くのチームがマークの素材に用いていたのが、新町・古町の特徴的な町割り。新町の短冊型の町割りと古町の一町一寺の町割りを対比して、様々に図案化していました。その他、「新町→武家屋敷/古町→問屋街」という対比を際立たせたマークや、二つの町の位置関係とそその間を流れる坪井川をテーマにしたマーク、熊本城を支える城下町としての新町古町を石垣で表現したマークなども登場しました。



4 各チームともマークを実際に暖簾に染め抜いて町屋に設置したイメージ図を提示してくれましたが、暖簾になるとマークだけのときよりもぐっと良く見えてくるというものもありました。



2 9つのチームから出されたマークの案は合計20組。各チームは10分間の持ち時間の中で、自分たちがデザインしてきたマークについてプレゼンテーションを行います。学生たちは、調査してきた新町・古町の歴史や特徴、そして実際に歩き自分たちの目で見て感じた町の姿を、鮮やかな映像とともに紹介してくれました。マークの解説においては、発想の段階からブラッシュアップし完成に至るまで、試行錯誤の過程を垣間見ることができました。



5 またプレゼンテーション自体にもそれぞれ工夫が凝らされていて、審査員をはじめ会場の人々をひきつけていました。中には江戸時代の侍がタイムスリップしてきて新町・古町について語る、というユニークな設定で発表してくれたチームもあり、会場の笑いを誘っていました。



→ 7

6 一次審査は各審査員が五票ずつを持ち、それらの票を気に入ったマークに投じていき、上位三案が二次審査へと進むという形式です。各審査員記名の上で投票を行いました。力作揃いで皆さんも悩ましそうな様子。



7 水戸岡さんは「マーク制作は全てのデザインの基本。最も簡単でありで最も難しい」と話し、「プレゼンもマークも、予想していたよりもずっと質が高かった」と感想を述べていました。

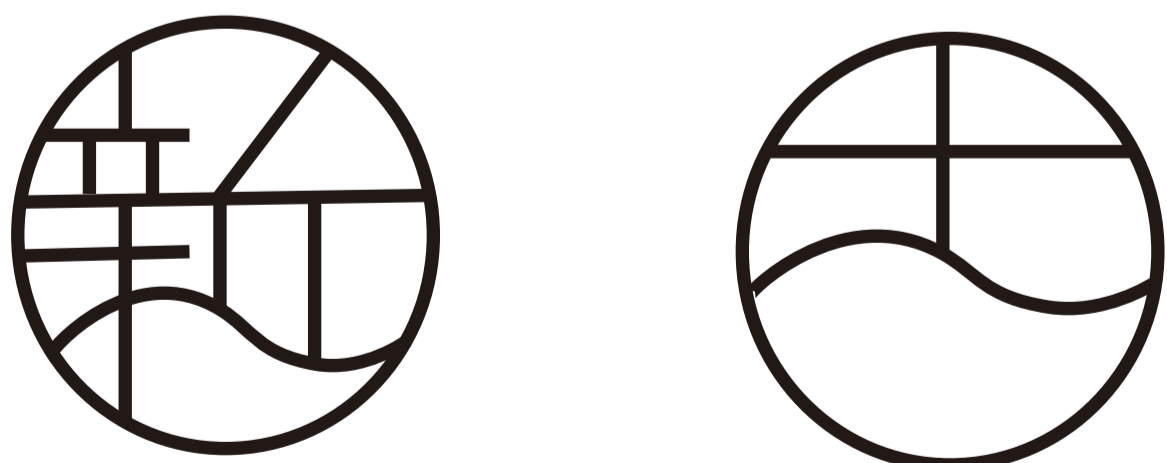
そして公開開票の結果、選ばれたのはこれら三対のマークです！



チーム②



チーム⑤



チーム⑨

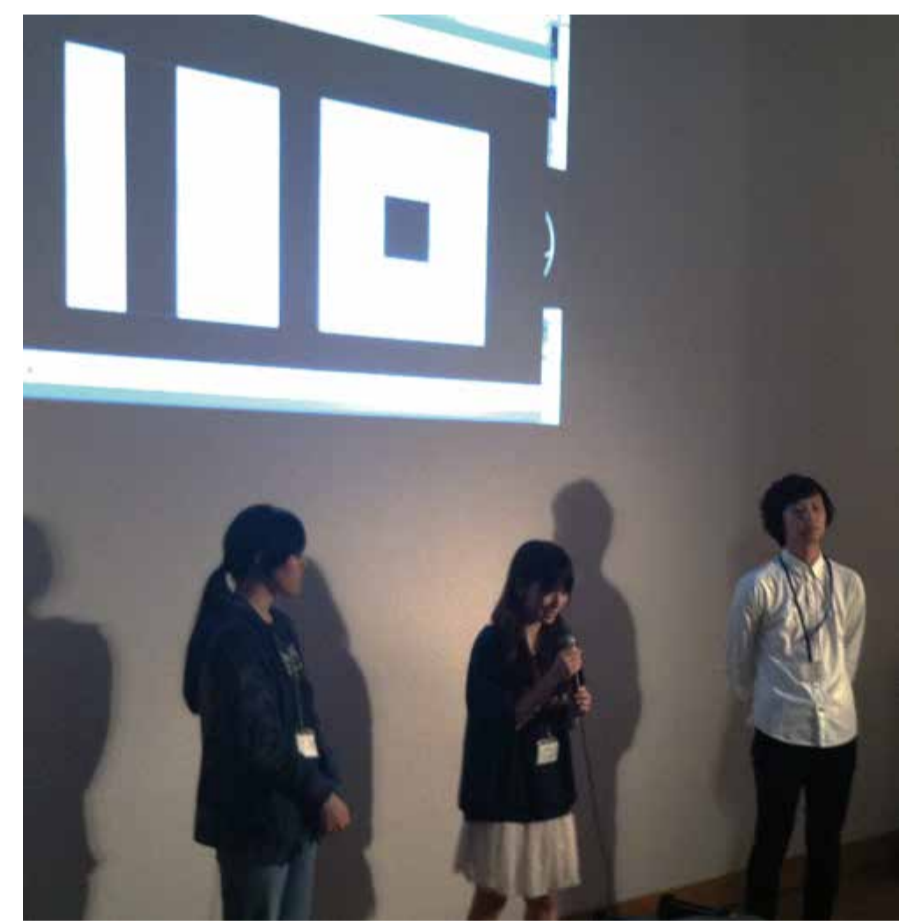
8 二次審査は、審査員全員で公開協議を行い、これら三対のなかから採用案を決定します。それぞれの審査員が自分の投票理由や所感を述べるところから意見交換が始まりました。

8 また審査員だけでなく、会場に来ていた町の方からも、のれんやマークの利用法についての質問・意見が発せられました。様々な意見が出され、マークの応用の仕方についても新たな提案がなされる中で、審査員の皆さんの気持ちも微妙に揺れているようでした。



9 そして最終的な協議の結果、チーム②の案が新町・古町のマークとして採用されることに決定しました！

選ばれたチーム②の学生たちは「かなり思い切った案だったため不安もあったが、採用されて非常にうれしい」と喜びを語りました。一方、惜しくも次点となった他のチームは、「これからのためのよい経験になった」と述べつつも、思いを込めて苦心しながら制作したマークただだけに悔しさもにじませていました。



10 学生たちに対して水戸岡さんからは、「今回皆さんは本当に多くのことを学んだと思う。ここからさらに腕を磨いてがんばってほしい」という激励の言葉が送られました。

表彰式では、二次審査に進んだ三つのチームが表彰されたほか、今回の新町・古町マークデザインワークショップに参加した全てのチームに対して、全審査員の署名入りのワークショップ修了証が手渡されました。最後に町屋研究会の宮本茂史代表は、「一生懸命町屋のことを考えてくれたことが本当によく伝わってきた。今回のワークショップに参加してくれた全ての方に感謝したい」とお礼の言葉を述べ、会場からは学生たちに向けて大きな拍手が送られました。